

シーン1

「……あら、おはようございます。勇者くん」

「毎日来てください、ありがとうございます。きっと神様も喜んでと思いますよ」

「もちろん、キミの顔が見れて、私も嬉しいです」

「……そんなに顔をじろじろ見られると、テレてしまうのですが……いつもと違う、ですか。そういう風に見えます？」

「私はいつも通り、キミと楽しい時間を過ごしているだけなのですが」

「あらあら、そんなに熱っぽい視線を向けられると、ちょっと……キマスね」

「大丈夫ですよ。具合が悪い訳ではないですから」

「……何か、エッチな感じがする？ ふふふ、そんなこと、言っちゃうんですねえ♡」
「正直なのは美徳ですが、時と場合を考える必要がありますよ？ ふふふ♡」

「いいでしょう。キミにはやはり、根本的に教えを説く必要がありそうです」

「さあ、懺悔室へ向かいましょう？」

「ふう……二人で入るには少し手狭ですね」

「え？ 私は聞き手側じゃないのか、ですか？」

「ふふふ♡ 実はですねー。今日は私の方からの懺悔しなければいけないことがあるのです」

「なので、こちら側で大丈夫ですよ」

「懺悔の内容というのは、キミに対する私の態度のことです」

「私はエッチな話題に対して、少々過敏に反応しすぎてましたね」

「だって、それを持っていなかったんですもの。今までは、理解できていなかったのです」

「頭ごなしに怒ってすみませんでした。ですが、これからは大丈夫です」

「私も、これを授かってからは、皆さんの気持ちがよく分かりました。これからは心を入れ替えて、神様に祈りを捧げられるようにします」

「大丈夫ですよ。不安そうな顔をしないでください。私は今、とっても幸せなんですから。だって……」

「ふふふ、ごめんなさい。キミに見られると思うと、勝手に大きくなってきてしまいました♡」

「ああ、驚くのは無理はないかもしれませんが、大丈夫ですよ。これは先日、神様から祝福により授かったものなのです」

「ふふ、作り物ではありませんよ？ さあ、触ってみてください」

「んっ……ふふ。きちんと肉できていて、感覚もあるんですよ」

「神様から頂いたものですからね。とても神聖で、高貴で……素敵なもの、なんですから」

「……どう、されました？」

「ああ、ごめんなさい。気付いてませんでした」

「少し、勃起されてますね？ 大丈夫。私も先ほどから硬くなり続けてますから。こんな快樂、我慢できる訳ないですよ。興奮したら、仕方がないです♡ 抗うのがバカバカしいと思えますよね」

「……あ、そういえば、大事なことを忘れていましたね。今日はまだ、祈りを捧げていませんでした。これはいけません。毎日の習慣ですからね」

「では、今日は……この聖根に祈りましょうか」

「……そうです。これに、祈るのです。神様から直接授かったものですからね」

「とても強い力が宿っていますから、加護の力も絶大だと思えますよ」

「ふふ、素直なのは美德ですよ。では、しっかりと目を瞑って、祈りを捧げましょう」

「はぁ……はぁ……んっ♡ あぁ……んっ……あうう……んっ♡」

「ふっ……あっ♡ イっ……んんっ、イク、男の人に、聞かれながら、私……ふたなりチンポ、シコって、白濁液、出す準備しちゃってる……あっ♡ んぐっ、あっ……これ、すっごく、興奮、しちゃうう……♡」

「……はぁ、はぁ、はぁ……んんっ♡」

「あは、目、開いちゃいましたね。我慢できなかったんですね。私のオナニー、見ちゃってますよ？ どうですか？ これ♡」

「あさましくて、下品な姿、んっ……ふふ、ふふふふっ♡」

「あらぁ♡ 勇者くんのおちんちんも、パンパンになってますよ？ 私とお揃いですね♡ あっ、これ、もう、ダメかも……んっ、んんっ、んあっ♡」

「出る、出ちゃうっ……んっ、んんんんんんんっ！！」

「あっ♡ くっ♡ んっ♡ はっ、はあっ、はぁ、はぁ……」

「んはぁ……あぁ……こんなに、出して、しまいました……はぁ、はぁ……」

「自分で言うのも、何ですが、匂いがすごい、ですよねぇ……ふふふっ♡」

「これが、新しい祝福の仕方です。神様から与えられたふたなりチンポから放たれる精液は、とてもありがたいもの、なんですよ♡」

「……んん？　あまりお気に召してない様子ですね。昨日祝福してあげたアンナは、一回ぶっかけてあげただけでトロトロに魅了されていたのですが……」

「なるほど、それだけの素質がある、ということなのでしょう。勇者としての力のおかげで、祝福が効きづらいということなのかな……」

「ああ、でも大丈夫。安心してくださいね」

「祝福の効果が薄いとはいっても、まったく効いてないというわけではないですね」
「私に任せてください。キミをしっかりと祝福して差し上げますから」

「精根でキミの中から直接、祝福してあげれば、何倍も効果があるので邪魔な勇者の力があっても、問題ありません」

「大丈夫。私に全部、任せてくださいね　怖がらなくても大丈夫です。キミは私を受け入れてくれるだけでいいのです」

「ほら、暴れないの。嫌がってはいないのでしょ？　こんなにおちんぽを硬くしたままなんですもの」
「興奮しているんですよ？」

「ふふ、大丈夫。あなたの体は私を受け入れる準備が、すでにできているのですよ？」

「……背中を感じる私のおっぱいの感触はどうですか？　とっても柔らかいですよね？　私はキミの身体に触れている箇所が、すごく熱くなっています。私の乳首、ぷっくり立ってるのわかります？」

「わかりますよね、キミのおちんちんもこんなに大きくなって、ビクビクしています。かわいい……」

「これから、女の人に、勇者くんのお尻の初めてを、食べられそうになっているのに、興奮してしまっているんですね？ やっぱり怖いですか？ 不安ですか？ ……それとも期待、していますか？ 大丈夫ですよ。これはすべて、神様からの祝福なのです」

「とても素敵で、気持ちのいいこと、なんですよ？」

「天にも昇る気持ちを、キミに沢山感じて欲しいです」

「ああ♡ 入っていったら。どうですか？ 分かります？ んっ、ゆっくり、ゆっくり、キミの中に、私のふたなりチンポが入っていったら…ああ♡ 締まるう…んっ♡ 異物感が、すごいですか？ お尻の穴をかき分けられていく感覚は、どうですか？」

「キツイですか？ 苦しいですか？ ふふ、初めてですもんね。大丈夫です。最初だけですよ♡ すぐに気持ちよくなります。私に任せてくださいね♡」

「ふふふっ♡ 体、ピクピクしちゃってます。キミの体はおちんぽに反応しちゃってますね。私のおちんぽ、きゅうきゅうって食いついて離さない感じですよ。啜えこんで、搾り上げられます。痛いくらいの締め付けが、心地よいですよ」

「んうっ♡ ああ、素晴らしい♡ 勇者くんのお尻、すーっごく気持ちいいですよ♡」

「ああああ♡ キミのおちんちん、ビクンビクンって跳ねてるじゃないですかあ」

「お尻の穴、えぐられて、感じちゃってるんですね。よかったですねえ。気持ちいいですねえ♡」

「ああ、すっごくいいですよ。キミの中、あったかくて、ぬるぬるで、んひっ♡ んああ」

「気持ちいい、気持ちいいですよ…んうっ♡ はあ、はあ、はああ…んうっ♡」

「ああ、神様ありがとうございます。私にこんな素敵なモノを授けてくださったおかげで、んあっ♡」
「女として生きていくだけでは、絶対に感じることでできなかつた快感を、全霊で感じる事ができるのですから」

「感謝します。んあっ♡ この、肉をえぐる、感触もお……んあっ♡」

「感謝します。甘くトロける快楽が脳まで届き、全身が痺れる感覚を……んううっ♡」

「感謝しますう♡ 勇者くんの中で、白濁液をぶちまける機会を与えてくれたことに、感謝します♡」

「ああ、気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 祝福を♡ 祝福をおお♡ んおっ、んっ、んお♡」

「はあはあはあ、キミも、もっと気持ちよく、なりましようねえ♡ わあ、すごいですねえ。キミのおちんぽ、火傷しそうなくらい、熱くなっています。私の手の中で、ビクンビクンって跳ね続けてますね。んあっ……はあ、はあ♡♡♡」

「握られただけで、気持ちいいんですよね？ ふふふ♡ 分かりますよお♡ だって、私のおチンポがぎゅううって締め上げられてるんですもの♡ おちんちん、シコシコされて、体が喜んでるんですよね？」

「お尻の穴、ミチミチに犯されて、気持ちよくなってるんですよね？」

「分かります、分かりますよお♡ んっ♡ あは、先走り汁で、私の手がベタベタです」

「いっぱい、感じて♡ んうっ♡ ほら、気持ちいい、気持ちいいねえ♡」

「ああ、こんなに震えて、愛らしいですね。私もゾクゾクしっぱなしです。勇者くんがこんなに乱れてくれるなんて……んふふっ♡ 本当に嬉しいです」

「……そろそろ、限界です？」

「出したくなったら、我慢せずに出して、いいですよ♡」

「ふふ、大丈夫ですよ。私のおちんぼも、もうすぐ、ですから……んんんっ♡」

「ああ、祝福を、んおっ♡ 格別の快樂と共に、大いなる、祝福をお♡ んっ、んんっ、んんんっ！」

「はあ、はあ♡ んっ♡♡！ ああっ♡♡！ イくっ♡♡ イきますっ♡♡ イくくううううううっ♡♡♡！！」

「ああ♡ 神様、この哀れな子羊に白濁の祝福を♡！ とろけるような快樂の祝福をお♡♡♡！！」

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡ 出てるっ♡ んんっ♡ 私の、精子、全部、中にい、んんっ♡ はあ、

はあ、んんっ♡ すごい、すごいですよお。キミのおちんちんからも、いっぱい、出ますねえ」

「びゅー、びゅーって……んっ♡ 私の手、すっごく熱いです。ああ♡……本当に、すごい、量……♡」

「はあ、はあ……、勇者くんの中、とっても素敵、でした」

「それに……んちゅっ♡」

「んはあああ……♡ すごいオスの匂い……♡」

「精液、美味しい♡ ふふふ。やっぱり、中に出した方が、より強く祝福できますね♡」

「これなら……大丈夫でしょう」

「今日はこれくらいで♡」

「……大丈夫です。これで終わりではありませんので。また、してあげますよ。では、今日のことは次の懺悔に来るまでは、忘れてくださいね♡」

「ふふふ……先ほどの祝福で私のお願いを聞いてくれるくらいにはいい子になってるから、おあずけですが……大丈夫でしょう」

「次までに、しっかりと貯めてきてくださいね」

「ちゃんとできたら、今日よりも、もっと気持ちよくなれますよ」

「大丈夫です。勇者くんならできます。私との秘密の約束、ですからね。期待しています。ふふふふ♡」